FUMI

ガムシャラに働いていた

会社員時代は、とてもハードな働き方をしていました。結婚して新居を探すときの条件は、タクシーで会社から家までワンメーターで帰れるエリアにあること。

終電かタクシーで帰宅する日々、休日出勤も当たり前。周りもみんなそうやって働いている環境でした。日付けが変わってからの帰宅、家の玄関にたどり着くとそのままへたり込んでしまう。それが日常で、そういう業界だ、仕事とはそういうモノだと思っていました。

仕事で感じていた違和感

しかし、そんな働き方を続ける中で、違和感も感じていました。

例えば、プロジェクトがスタートして半年ほど経った頃にクライアント企業の担当部長が移動、新しい担当部長の意向で変更が発生。結果、それまでのプロセスの 8 割がボツになることに。

睡眠時間を削って取り組んでも、作ったものが無駄になっていく。成果に繋がるならいいけれど、これはいくら徹夜しても、やってられないな。そう感じることが増えていきました。

自分のチカラの無さはもちろんあったけれど、心血注いで創ってきたものが亡きものになっていくことが本当に辛かった。制作チームメンバーや代理店の担当の人と飲みに行って、愚痴を言って終わる。この繰り返しは不毛だなと思いました。

この頃から「仕事って何だろうな?」「これは仕方のないことなのかな?」「こういうことを続けていくしかないのかな?」と戸惑いも感じ始めていました。

目標は雑誌に載ること

キャリアを積んでいく中で、ひとつの目標にしていたのは「業界誌に載ること」でした。雑誌に載るようなネームバリューのあるプロジェクト、そういう仕事をすれば達成感に溢れ、さぞ充実していることだろう。いつか、Web 業界の雑誌に載って「プロジェクトの裏舞台」で紹介されたら、最高だろうな!と夢を膨らませていました。

そして奇しくも、制作会社の代表と上司と共に取材してもらう機会が巡ってきました。ドキドキしながら雑誌を手にし、ページをめくりましたが、記事を見て「これじゃなかった、こんなハズじゃなかった、、」と愕然としました。自分が思い描いていた仕事へのあこがれや期待と、現実とのギャップを目の当たりにして、それがいかに浅はかな考えだったか気づきました。

今思えば、梯子をかけ違えていました。

「業界紙に乗ること=やり甲斐のある仕事」と思い込んでいたけれど、仕事のやり甲斐は雑誌の記事に載っても実感できない。自分が望んでいることはこの延長線上では無いことに初めて気が付きました。

会社を辞めようと思う

この延長線上ではないと気がついてしまった頃から、「働くって、どういうことだろう?」と真剣に考えるようになりました。何冊もの本を読んだり、自分の思いを書き綴ったりして、ノート 3 冊を埋め尽くした頃、ようやく自分の答えが出てきました。それは非常にシンプルなものでした。

「顔の見える人に、ありがとうを言ってもらう」

これをするには、この会社じゃ無理だな、辞めるしかないなと思いました。

まず、妻に相談しました。結婚してから 1 年程しか経っていない中での決断で、なんと言われるか心配でしたが、「身体のことも考えたら、そういう事かもしれないね」と受け入れてもらいました。

次に、社長に相談しました。社長は僕の話に耳を傾けてくれた上で、穏やかな口調で「阿部くん、見込み顧客はいるの?ビジネスモデルはあるの?」と尋ねました。

「いいえ、今は、特にないです、、、」
「それは、つまり、無理ってことだよね」
そう言われて、返す言葉が見つかりませんでした。

社長の言葉を胸に思い悩みました。でも、やっぱり諦めきれない。やってみて駄目だとなったら、また別の会社に勤めるという選択肢もあるのではないか。やらずに後悔するよりは、まずはやってみよう。そう心を決めて、一週間後、再び社長に自分の思いを話しました。

「分かった、阿部くん。一年やってみて、駄目だったら戻っておいで」
この言葉にどれほど救われたか。

2007 年 6 月に会社を退社、YUKA と FUMI で「YUKAFUMI」を始めました。